
心優しき悪魔

双葉小鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心優しき悪魔

【Nコード】

N2081I

【作者名】

双葉小鳥

【あらすじ】

天界で最高位の天使の任を与えられた高位の天使：エビンは最愛の分身と友が止めるのを振り払ってまで大罪を犯した墮天使。6枚の翼から羽が抜けて…悪魔になった。天界一の天使。今宵、心優しい悪魔の物語。

第一話 天に背きし者

長い金髪。透き通る6枚の羽。6枚の翼の天使が夜空に輝く物を仰ぎ見み、静かに一言。

「…あのお方が造った…月と星…この余のすべての物…か…」

6枚羽の天使の深く優しい紫色の瞳には、瞳と同じ深い迷いが見られる。だが彼は、それをひた隠すように静かな光に目を閉じる。

しばらくして、ゆっくり目を開けて…自分の美しく透き通る翼から羽を1枚握り…また、静かに目を閉じる。

そして、自分の羽を迷い無く握り潰すと、6枚羽の天使は自嘲たように小さく笑って言う。

「…フツ…答えはもう出ているじゃないか…」 彼は目を開ける。その瞳はさつきまでとは違い、迷いが無いただ真つすぐな鋭い瞳に変わっていた。

そして、天使は迷い無く墮ちることを選んだ。 天使はゆっくり、ただし、迷い無く真つすぐに天界から魔界を見下ろして、そう…墮ちようとしていた…。

だが、それを阻止した声があった。

「墮天する気か？」

「墮天する気なの？」

同時に話しかけられて彼は弾かれたように振り返ると。いつの間にか背後に4枚羽の男と6枚の翼を背負った女が立っている。

金髪碧眼で4枚の翼を持つ男…ラヒユレイと金髪紫眼で彼の天使と同じ姿の6枚羽の女の天使を見て、目を見開いた。

だが、彼は平坦な声音で言葉を返した。

「そうですよ。ラヒイレイ、ディアナ」

「…そう…」

ラヒユレイとディアナが同時に悲しく微笑んだ。

「ラヒユレイ、ディアナ私を止めますか？」

彼がさつきよりも、もつと平坦な声音で聞いた。

「そうね…そう、なる…わ…だけど!!…ッ、私はたった1人の分身を壊すなんて事…!!…したく無い…!!だから!だから!…:…つぶ…くつ…し・質、問に…っ…答えて…?…ひつく…エビン…:…」

「ディアナ…泣くな…」 ラヒィレイにしがみつきながら必死に自分の分身…6枚羽の天使エビンにディアナは訴えながら、紫色の瞳から大粒の涙を流した。

「なにが、言いたいのです?」

それを見ても無表情と平坦な声音は変わら無かった。

「…俺達は…お前がなぜ大罪を犯そうとするのかを知りたい…」

「…そんなこと貴方なら分かっているでしょう?私は、あのお方が信じられ無くなったからです」「…重傷だな…。お前は…いつから無表情で取り繕うようになったんだ?お前…いつもは感情豊かだったじゃないか…!! ラヒィレイが悲鳴のような声で悲しそうに言う。

「さあ?そんなの演技に決まっているでしょう?そんなぐだらな…:…」

「なんだと!!もう一度言ってみろ!!」

エビンの話しが終わる前にラヒィレイの怒鳴り声のエビンの話しを遮って、片刃の剣が風を切りエビンの上に振り下ろされた。

だが、エビンは避けようとしなかった。

「!?!…なぜ避けない!?!」「そうですね。なぜ…と聞かれましても。貴方の性格上私を殺せ無いのは分かっていた。…ですが…:…貴様のその甘さにヘドが出る!!」

無表情だったエビンの紫色の瞳が瞬時に血の色に変わって、怒気の混められた低い声で怒鳴った。

そう、エビンは怒っていた。

エビンは何も無いところから5本の合口を取り出し、ラヒィレイとディアナに投げ付けてそちら側に気を引き付けておいてさっさと踵

を返し。天界から素早く真つすぐ魔界に堕ちた。

その背中の月の光を吸収するかのように光る6枚の翼からすべての羽が抜けて、黒くて鈍く月の光を弾く6枚の翼になる様をラヒユレイとディアナは見て絶句した。

だが、そのせいで天界のすべての天使が束になっても太刀打ち出来ない強力な悪魔が魔界に誕生してしまった。

「ヒイイイ！！お、おおお辞めくださいいい！ユヒイリア様ああ！！」

屋敷の小悪魔が悲鳴を上げて、首にはチエーンの長い6枚羽の天使が彫刻されたペンダントと、腰までの長い銀髪と青紫の瞳で15歳になる男の子：ユヒイリアの腕に抱えられている高価な皿を見て言った。

「そうでございますう！ユヒイリア様にそのような事をしてお怪我でもなされたら私もが公爵様に怒られてしますう！！」「大丈夫だよ！落つことしたりしないから！！」

小悪魔と小鬼が停めようとするのにユヒイリアは元気良く言つて、歩き出した。

「あー！！」

ユヒイーが小さな悲鳴と一緒にユヒイーの手から皿が滑った。

パリイイン

「……！？……ひやあああああ！！さささ皿がああ！！！！」
ムンクのような顔になった

「あ……やつちやった……」 台所でのやり取りが、廊下に響いて寢室まで届いていた。

「ん、うゝああー！！」

魔界でハーベルト公爵と呼ばれているの悪魔が、広い寝室の寝台でじゃ無く、寝椅子で大あくびを1つした後には自慢(?)のパープルの長い、ふくらはぎまである髪をかき上げて起きた。

ついでに、彼の明るい赤の瞳はとても悲しい色になっていた。

しかし、それを隠すように悪魔は首をふって一瞬後には台所まで行った。

「ユヒイー…サリムとカランのお仕事を邪魔してはいけませんよ？」

悪魔はユヒイー限定の優しい微笑みと、慈愛に満ちた優しい声で言った。

「エドウィン兄様!!」

ユヒイーの表情がパツと明るくなった。

「ユヒイー…何か…言うことがありませんか？」 悪魔…エドウィンが鋭く、かつ優しく言った。

「はい…兄様…ごめんなさい…」

ユヒイーはしょんぼり頭を下げて謝った。それを見てエドウィンはずっとユヒイーの頭の頭の上に手を伸ばした。

ユヒイーは叩かれると思って、ぎゅっと目を閉じて体を強張らせた。

しかし、ユヒイーをエドウィンは怒ろうとしないでユヒイーの前で両膝を付いてユヒイーの頭を優しく撫でて、優しい微笑みと声でユヒイーに言った。

「…ユヒイリア良く謝りましたね。ですが、サリムとカランには謝りましたか…？怪我はしませんでしたか…？」

「あ…サリムさん…カランさん…お仕事の邪魔してごめんなさい…」

「いえいえ。確かに邪魔でしたけどユヒイリア様！そんなにしょんぼりなさらないで下さい！！それに私達に『さん』はいりません。何せ魔物ですから」

小悪魔のサリムが無邪気に笑いながら言った。「そうございます」

う。私達は皆、ハーベルト公爵様の下僕なのですうからあ」

小鬼が可愛くウインクをして微笑んだ。

「そうだけど…」

「ふう…ユヒイー…言い淀んでないで私の質問は聞いていましたか？」

「あ！うん！兄様！大丈夫だよ！！」

「くす…そのようですと大丈夫そうですね。」

元気良く手を見せたユヒイーを見て、エドウィンはほっとした。

「うん！！大丈夫！！でも、なんでいつもは『ユヒイー』なのに今日は『ユヒイリア』なの？」

しかし、はそんなこと気にしないユヒイーが無邪気に笑って言った。

「…それは嫌な予感がするからですよ…？」

バサバサバサ

小さな 羽ばたく音が遠くから近くに聞こえて来た。

「公爵様！！大変にございます！！」

「…なにが…大変なんです…タアヤ…？」

エドウィンは飛んで来た小悪魔、タアヤのほうを向いて落ち着いた声音で聞いた。

「はっ！はい！！サリマン卿が公爵様に会いたいと言ってやって来ました！？どうしましょう！？」

「ふう…やはり…来ましたか…ふう、丁重にお引取…いえ…おもてなし、して差し上げませんと、ね…さあ…ユヒイー人間界のお屋敷に向かいなさい…タアヤ…ユヒイーを…連れて行きなさい…」

落ち着き払った優しく慈愛に満ちた声音だったがタアヤが見たエドウィンの顔はたいいていの魔物が震え上がるほど恐ろしい顔になっていた。

「は、はい！！」

「ちえ…行かないとダメ？」

「ユヒイー…駄々をこねいで…言うことを聞いて下さい…ね…」

エドウィンは両膝を付いてユヒイーの腕を優しく握り、さっきまでの恐ろしい顔をすつと隠して、軽く肩を竦めて優しく「ふふ」と笑って言った。

「ユヒイリア様参りましょう。」

タアヤが軽く促すとユヒイーは軽く唇を噛んで俯いて、首に下げた6枚羽の天使が彫刻されたペンダントを握り閉めて顔を上げて言った。

「分かった…」

渋々だがタアヤに連れられてふわ…と消えた。エドウィンは2人を見送ると、まるで感情のない仮面をつけたような表情に変わるのと同時に冷たい声音で言った。

「あの忌ま忌ましい蚊をここへ連れて来なさい…!!」

「は…はい!!」

「た・只今!!」

サリムとカランが慌てて『忌ま忌ましい蚊』…こと吸血鬼を呼びに言った。

「チツ…こつちらが大人しくしてたらやっただで図に乗りやがって…ユヒイーに手え出そうとしやかって…」

2匹が居なくなつたのを確認して1人ぐちた。それからしばらくして忌ま忌ましい蚊…じゃないサリマン卿がサリムとカランに連れられて来た。

「おお！久しぶりだなハーベルト公爵！」

「お久しぶりです。サリマン卿…」

(チツ…ムサイんだよ！貴様の全てが！な〜にが『お久しぶりだなだクソツタレ！！消えなよ？消えられないなら俺が消してやつから消え失せる!!！)

表面だけ微笑みをたたえているが内心では、ぼろくそ言っている。「ん？ユヒイリアはどこなんだ？」

「ああ…ユヒイリアですか？彼は今外出しているんです」

(チツ…一々、ムカつくんだよ！！何でユヒイーを貴様が呼び捨ててんだよ！？『様』付けるよ！『様』！！…つか消えてくんね？) すごい二面性…いや性悪？さっすが魔界の悪魔…と感心しそうです。

「そうか」

「そうですよ」

サリマン卿にエドウィンは和やかな顔をして言った。

だかは…あえて言わないが…凄まじかった…。

「おや？ユヒイー？おじ様は？」

「あ…お仕事だよ？それよりリクト兄…何？この有様…それと何してんの？」

リクト兄と呼ばれた黒髪で茶色の瞳を持って、尚且つ美形の18歳の青年が何故か床一面に散らばる羽根膝を付いてかき集められ、こんもりと小さな羽根の山が出来ている。

ユヒイーは沈黙して、ここをこんな有様にした元凶を見た。

その元凶はユヒイーより1つ下の双子の弟達の兄、アルドナと弟、アーカスがぎゃあぎゃあ言い合って肩より下のさらさらの赤髪を振り乱しながら、羽根枕で殴り合っている。

その瞳は無邪気な青を輝かせて、愛らしい顔がよりいっそう愛らしくなっていた。

しかし、許しがたい事に、また無残にも羽根枕であった物がまた1つ床一面に散らばった。

…とてつもないくらいひどい有様だ…そんなことお構いなしの双子を見て、耐え切れ無いとばかりにリクトが双子の仲裁に入る為に動いた。

「くらえ！アルドナ！枕コーゲキ！うりゃ！！」

ぼっふん

一カ所の床に集めた羽がぶわあ…と舞って頭上から、ふわ…と降って来るの見てをリクトは拳をぶるぶる震えさせた。(うっわあ) やばそう…リクト兄ん顔いつもより厳しい顔になってるし…リクト兄、大人しいけど怒ったら面倒なんだよな…ま、しょーがないかたずけてよ…と…)

リクトはユヒイーがそんなこと考えている事など気せずに、つかつかと双子に近かずにいく。「アルドナ…アーカス。いい加減にしる…!」

ドスのきいた声で言うとすかさず拳で双子の頭を殴った。

「うっうっ

「うっ…」

「痛…!」

小さく悲鳴に近い声だった。

「なんで殴られたか分かるだろうなあ??」

「「はい…」」

「よし。んじゃあかたずける。すぐにかたずける。」

双子が頭を押さえてかたずけ始めた。

「ユヒイー!後はこいつらにさせておけ。後…ちよつと来い」

「なあに?リクト兄?」「あいつらがかたずけがすんだらお茶にしたいから菓子を作るか買うかして来てくれないか。」

「うん、分かった。んじゃ小麦粉とチョコ買ってこないと…後は…」

「カボチャを蒸して潰し奴は俺が作っておくから行っておいで」

リクトは優しく微笑んだリクトの顔には怒りの顔は無くなっていた。

それと、アルドナとアーカスがすべてかたずけたのは、ユヒイー

がカボチャとチョコのクッキーとチョコケーキ、りんごパイ…双子
が大好物すべて作り終えてしばらくしてからだった。

第一話 天に背きし者（後書き）

えっと…

初めまして。双葉小鳥です。

…はつきり言って書くことが無いので…

気軽に読んで下さい。としか言えませんが…

とにかく…楽しんで下さい。

短くてすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2081i/>

心優しき悪魔

2010年10月14日05時21分発行